

焼失住居から見る古墳時代前期の植物利用

滝澤 誠・高橋 敦

要旨 桶川市に所在する楽上遺跡と楽上Ⅱ遺跡からは、古墳時代前期の焼失住居が検出され、炭化材が良好な状態で出土した。そこで両遺跡から検出されている炭化材の樹種同定を行い、大宮台地周辺地域で既に分析が行われている同時代の遺跡と比較する。各遺構から出土した土器を検討した上で時期的な差を考慮し、古墳時代前期における当該地域の植生環境と植物利用の実態を明らかにする。

はじめに

平成28年度に報告書が刊行された楽上遺跡と楽上Ⅱ遺跡からは、古墳時代前期の住居跡が見つかった。この中に、床面から多くの炭化材が検出される、焼失住居が含まれていた。

本稿では両遺跡の焼失住居から検出された炭化材の樹種同定を行うと共に、大宮台地周辺部において炭化材樹種同定が行われている古墳時代前期の焼失住居を抽出し、遺物と炭化材の樹種から当該期の植物利用状況について考察を行うものである。

1 各遺構の概観と時期（滝澤）

1-1 楽上遺跡

楽上遺跡は桶川市川田谷字狐塚南に位置する遺跡である（第1図）。当遺跡からは古墳時代前期の住居跡が5軒検出された。この内、第3号住居跡と第4号住居跡では床面付近から炭化材や炭化物層が検出されたため、焼失住居と考えられる。

1-1 A 第3号住居跡（第2図）

主軸長3.24m、南北長2.92mのやや小型の住居跡である。床面から厚さ20～30cm程の炭化物を多く含む層が検出されており、焼失に伴う屋根の崩落層と推測される。

同層中からは炭化材が多く検出されており、炭化材は住居跡全体に広がる。検出状況は、やや西に寄るが住居の中央から放射状に分布するため、垂木材である可能性が高い。材は丸木材を主体と

するが、加工材も含まれる。材の樹種は全てコナラ材が用いられていることが分析によって判明した。分析の詳細は2-1の高橋氏による分析結果を参照していただきたい。

丸木材・加工材共に同じような幅の材が多いことから、細い木、または細い部位はそのまま丸木材として使用し、太い木は幅を調整するために加工して使用したと考えられる。

梁や桁・柱と思われる材は検出されなかったため、それらの材は被熱しなかったか、一部抜き取られた後に焼失した可能性がある。

遺物の出土は僅かで、形になるものは高壙と塙の2点のみであった（第3図）。高壙は壙部のみの出土で、口縁部が緩やかに内湾する。塙はくびれ部の上と下の長さがほぼ同じで、くびれ部から口縁部にかけて直線的に開く。

床面直上と炭化物を多く含む層の中には遺物が含まれておらず、2点とも炭化物を多く含む層の上から検出された。そのため焼失の時点で屋内は片付けられていたと推測され、床面と炭化材を含む層との間に間層が無いことから、住居の廃絶に伴い人為的に焼失された可能性が高い。遺物は屋根の焼失後に投棄されたものと考えられる。

1-1 B 第4号住居跡（第2図）

東西長は調査区域外に続くため不明だが、主軸長5.59mと比較的大型の住居跡である。炭化物は全層中に少量含まれている。

炭化材は床面付近の壁際から検出されている

が、細く短いものが多い。方位等にも統一性が認められないため、炭化材の用途は不明である。材はコナラ材を主体とするが、クヌギ材も含まれることがわかった。

遺物は少なく、形になるものは台付甕と高壺、ミニチュア土器の3点であった(第3図)。この内、台付甕は頸部のくびれがゆるやかで胴が張る、前野町式の様相を持つ土器である。

覆土中に含まれる焼土や炭化物が少ないとこと、また炭化材も細く短いものが多いことなどから焼失住居として良いのかわからないが、他の遺跡でもこのような形で炭化材が検出される住居の例があることから、焼失住居の一形態として捉えたい。

1-2 楽上II遺跡

楽上II遺跡は桶川市川田谷字小在家に位置し、樂上遺跡の北側に隣接する遺跡である(第1図)。古墳時代前期の住居跡が2軒検出され、この内、第2号住居跡では床面付近から炭化材が多く検出されたため、焼失住居と考えられる。

1-2 A 第2号住居跡(第2図)

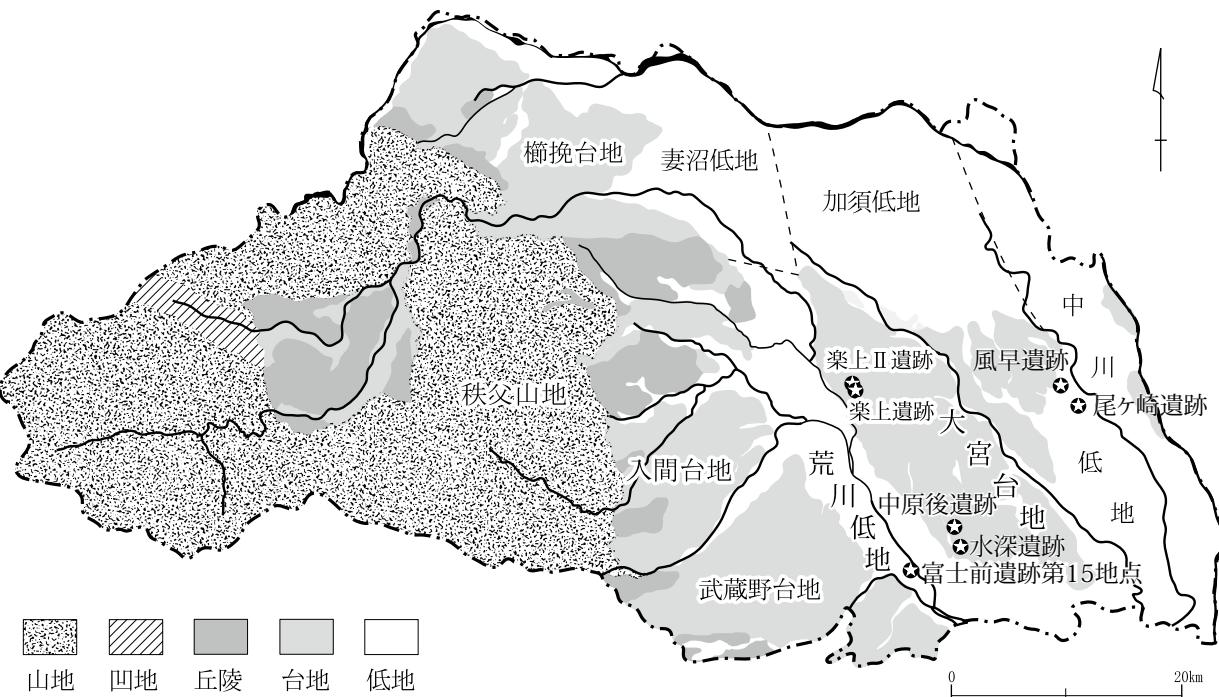
長軸4.66m、短軸4.19mのほぼ方形の住居跡である。

炭化材の残存状況はあまり良くないが、住居の中央から放射状に分布するため、垂木材である可能性が高い。材の樹種は樹種同定の結果、全てクヌギ材であることがわかった。

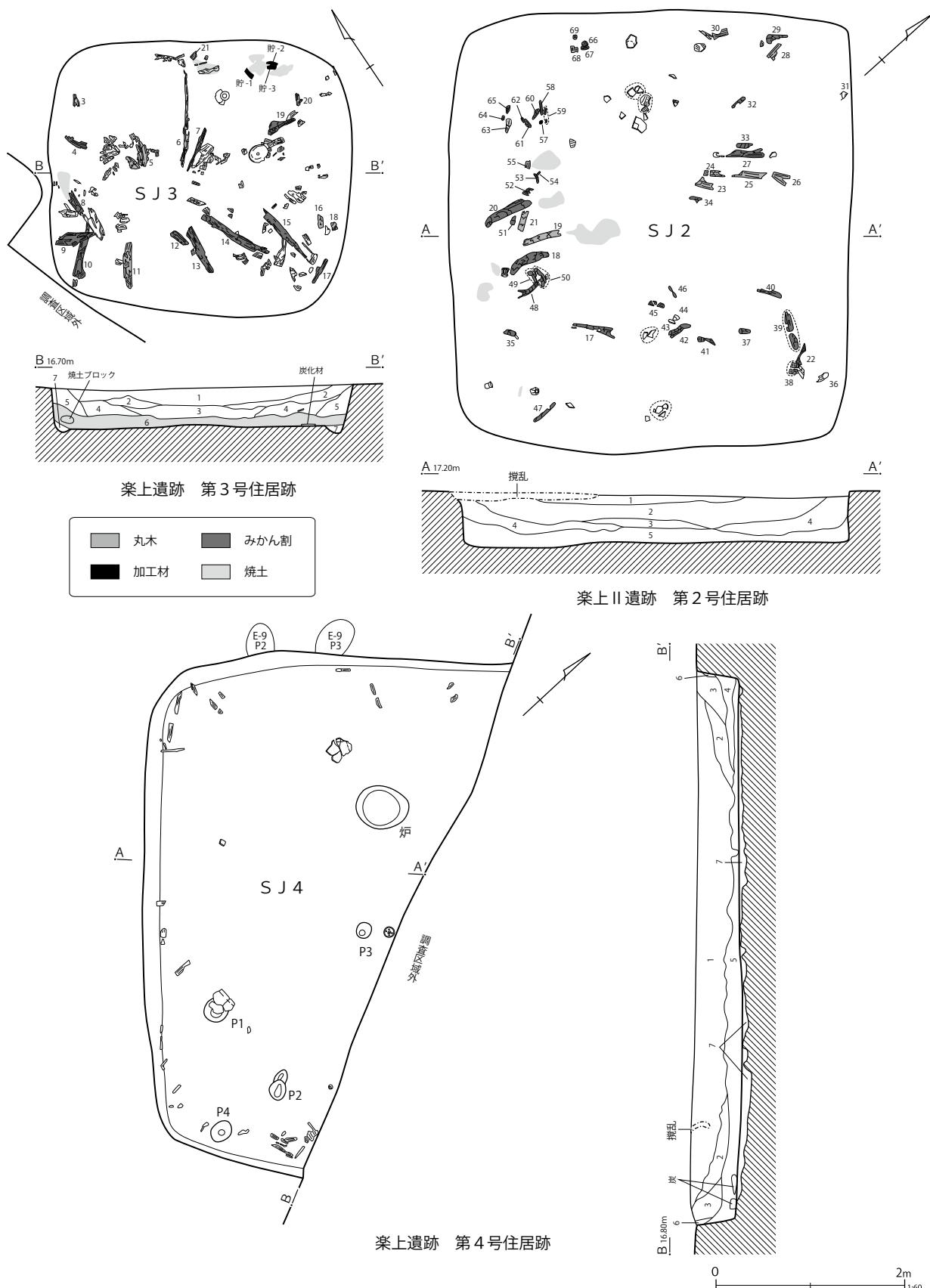
遺物は壺や小型壺、台付甕など6点が出土している。壺は単口縁の壺であり、外面はミガキの上に赤彩が施され、底部には木葉痕が残る。尾ヶ崎遺跡K-13号住居跡出土の壺と類似しており、同遺構よりもやや新しい様相を示す(第3図)。

土器と炭化材は同じ土層中から検出されているため、不慮の火災なのか、意図的に残したのかはわからないが、土器が残されたまま焼失されたと考えられる。

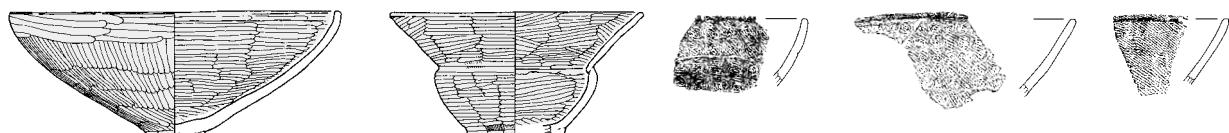
以上、樂上遺跡と樂上II遺跡の焼失住居について見てきた。時期については最後にまとめているため、ここでは結論のみ述べると、樂上遺跡第4号住居跡が最も古く、続いて樂上遺跡第3号住居跡、樂上II遺跡第2号住居跡の順で新しくなっ



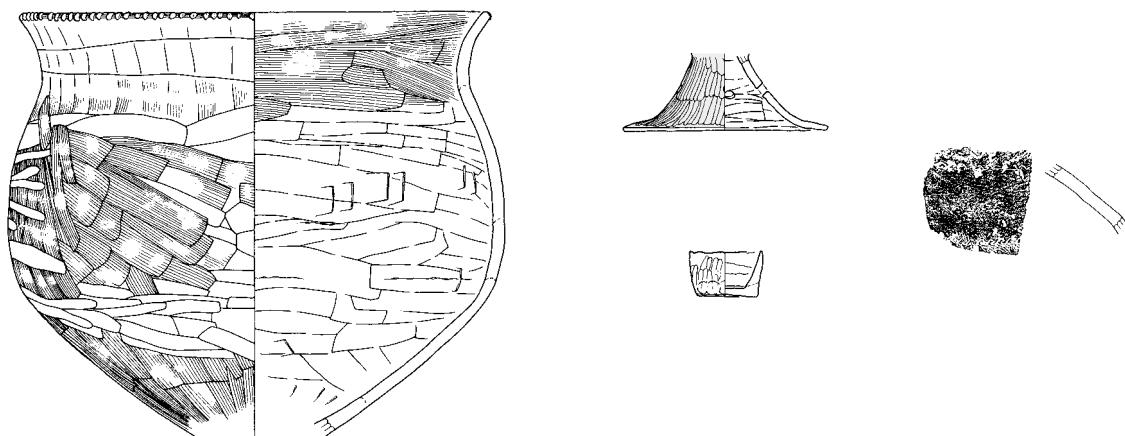
第1図 遺跡位置図(筆者作製)



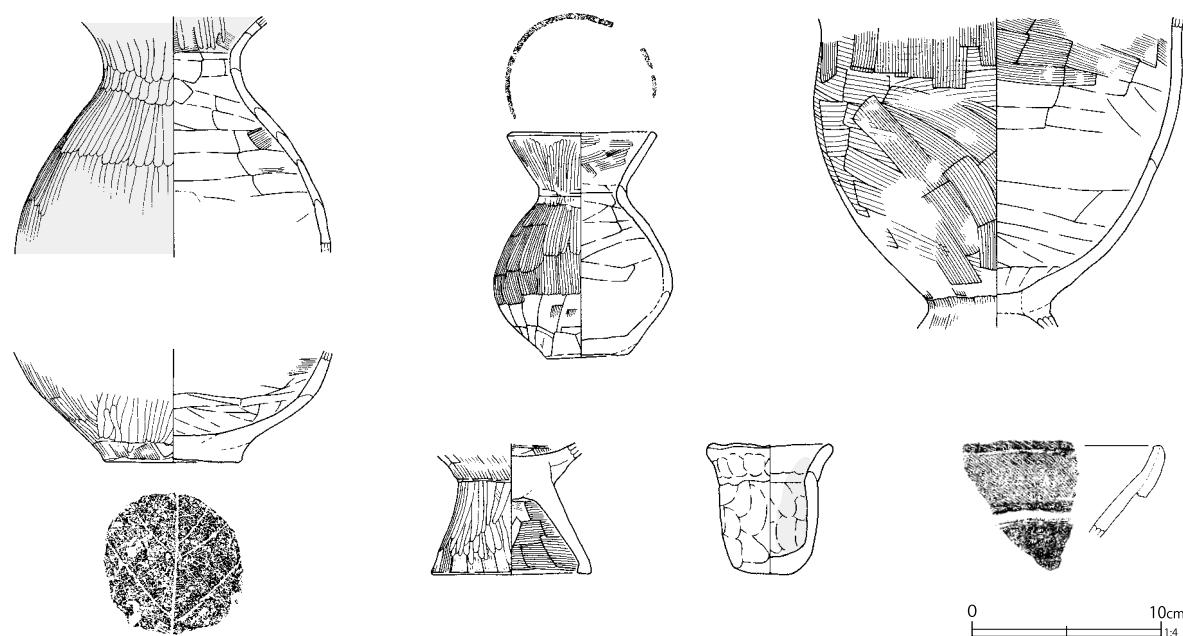
第2図 樂上遺跡・樂上II遺跡の焼失住居
 (『樂上／樂上II／薬師堂／石神／石神III』より引用、一部改変)



樂上遺跡 第3号住居跡



樂上遺跡 第4号住居跡



樂上II遺跡 第2号住居跡

第3図 樂上遺跡・樂上II遺跡出土遺物
 (『樂上／樂上II／薬師堂／石神／石神III』より引用)

ていくと考えられる。

この中で、楽上遺跡第3号住居跡と楽上Ⅱ遺跡第2号住居跡が距離としては近接しているが、炭化材樹種同定の結果、使用される材の樹種が全く異なるという状況が判明した。これが時期差によるものなのか、地域的なものなのかを知るために、大宮台地周辺部で過去に炭化材樹種同定が行われた焼失住居の例を概観していく。

1-3 大宮台地周辺の焼失住居

今回分析の対象としたのは、大宮台地周辺部に位置する春日部市（旧庄和町）尾ヶ崎遺跡、風早遺跡、さいたま市（旧浦和市）中原後遺跡、水深遺跡、志木市富士前遺跡第16地点の5遺跡8軒である（第1図）。

いずれも古墳時代前期の焼失住居と考えられている遺構であり、炭化材樹種同定が行われている住居跡のみを対象とした。

1-3 A 尾ヶ崎遺跡

尾ヶ崎遺跡は北葛飾郡庄和町大字西金野井字尾ヶ崎に所在する。当遺跡では4世紀代の住居跡が15軒見つかっている。このうちK2号、K5号、K6号、K13号住居跡から検出された炭化材の樹種同定が行われているため、各遺構の時期について見ていく。

K2号住居跡は長軸3.6m、短軸3.3mの南寄りに炉跡を持つ住居跡であり、壺と台付甕が出土している（第4図）。台付甕の頸部や壺の中に古手の様相を持つものがあるが、「くの字」状の頸部を持つ台付甕等も出土している。

炭化材は全体から検出されており、北側に多い分布状況を示す。多くは放射状に分布することから垂木材と考えられるが、北辺隅と南辺隅では炭化材が直立した状態で検出され、柱の可能性が指摘されている。

K5号住居跡は長軸4.0m、短軸3.5mの北西寄りに炉を持つ住居跡で、壺、小型土器、小型壺型土器、台付甕、器台、高坏が出土している（第

5図）。頸部の屈曲が強い台付甕や単口縁の壺などが出土している。

炭化材は不規則に並ぶが、一部放射状の広がりが認められるため、垂木材である可能性がある。床面の被熱も確認されているため、屋根の倒壊後も床面付近で燃焼し続け、炭化材の配置に歪みが生じたと推測される。

K6号住居跡は長軸5.4m、短軸4.5mの住居跡で炉跡は検出されていない。遺物は壺、台付甕、甕型土器、手捏土器等が出土している（第6図）。頸部の屈曲が強く、球胴型化している台付甕があり、他の遺構よりも新しい様相を持つ。

図示されている炭化材は少ないが、床面全体に焼土と炭化材が広がり、屋根材と思われるカヤが大量に検出されている。床面も炉跡がわからなくなる程全面が被熱していたという状況から、屋根の倒壊後も長時間に亘って燃焼し続けていた可能性が高い。炭化材の検出状況は点数が少ないとため、用途は不明である。

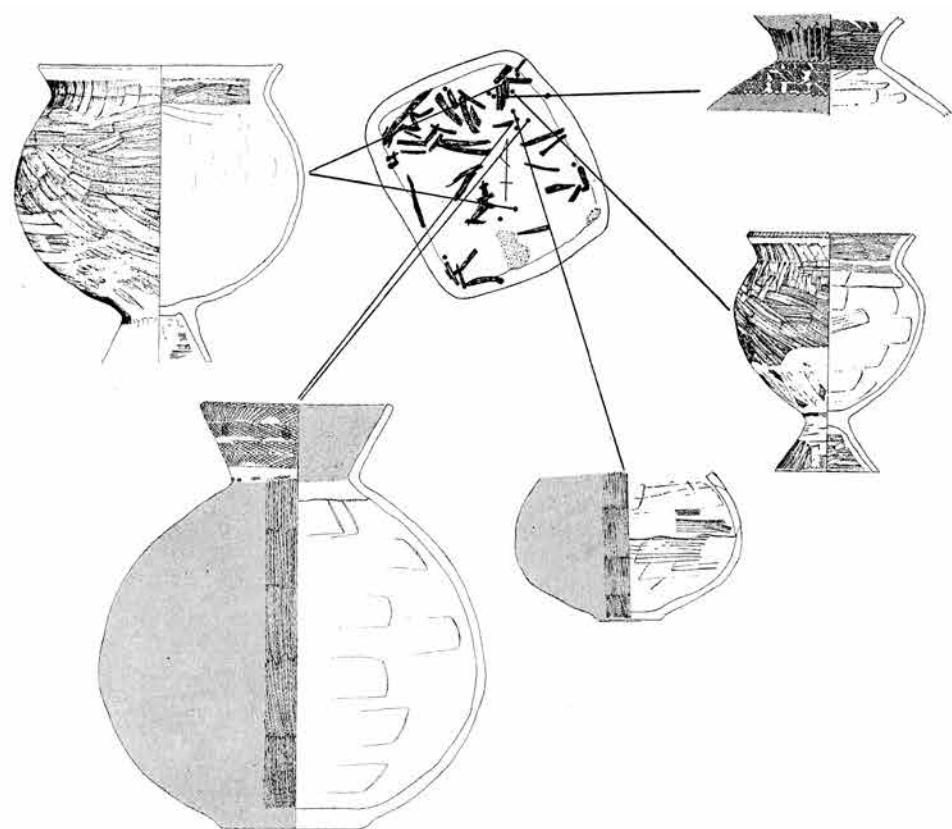
K13号住居跡は一辺3.1mの方形の住居跡で、北西寄りに炉跡が検出されている。遺物は壺、台付甕、小型台付甕、高坏がある（第7図）。

炭化材や焼土は壁寄りから検出されている。炭化材は放射状に分布するものと、壁際から壁に沿って検出されているものがある。前者は垂木材と考えられ、後者はK2号住居跡の例を参考にすると柱材の一部である可能性が考えられる。

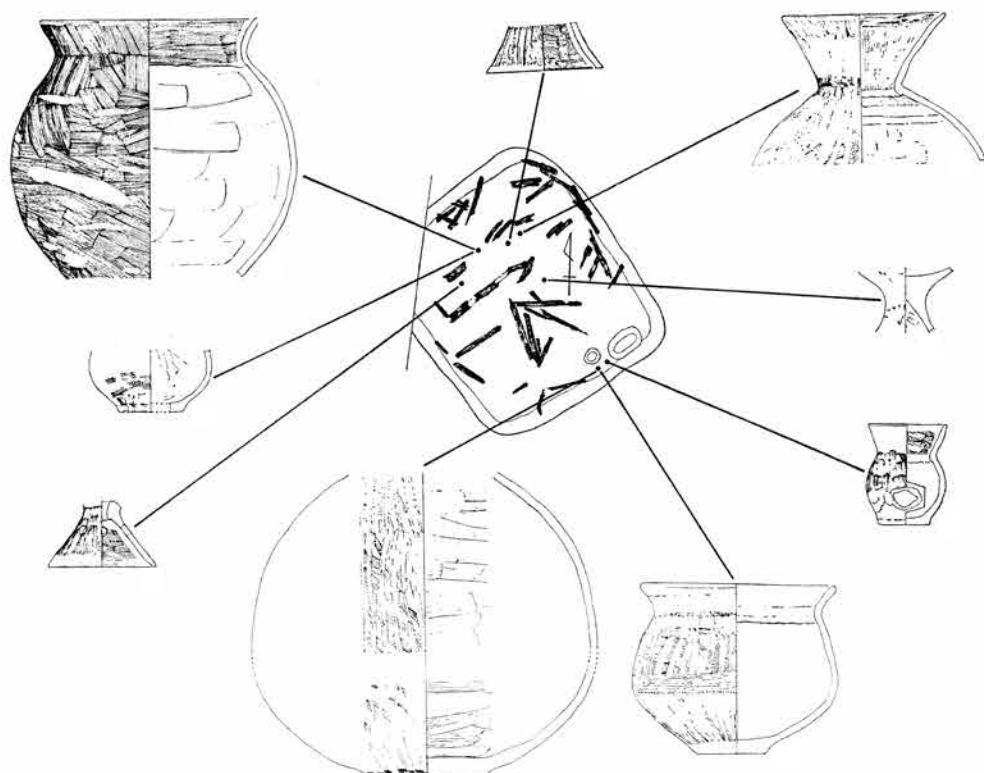
1-3 B 風早遺跡

風早遺跡は北葛飾郡庄和町大字西金野井字風早に所在する。当遺跡では4世紀代の住居跡が2軒検出されている。この内、第2号住居跡から炭化材が検出されており、焼失住居の可能性が考えられている（第8図）。

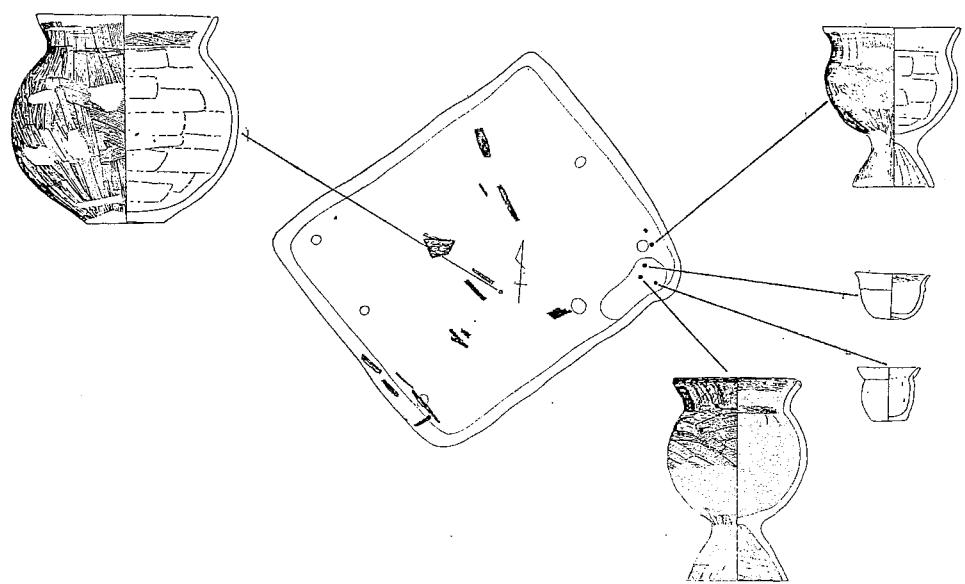
第2号住居跡は、長軸約7.8m、短軸約7.5mとやや大型の住居跡で、北西寄りに炉跡が検出されている。遺物は壺、小型壺、台付甕、高坏の他に装飾器台等が出土している。



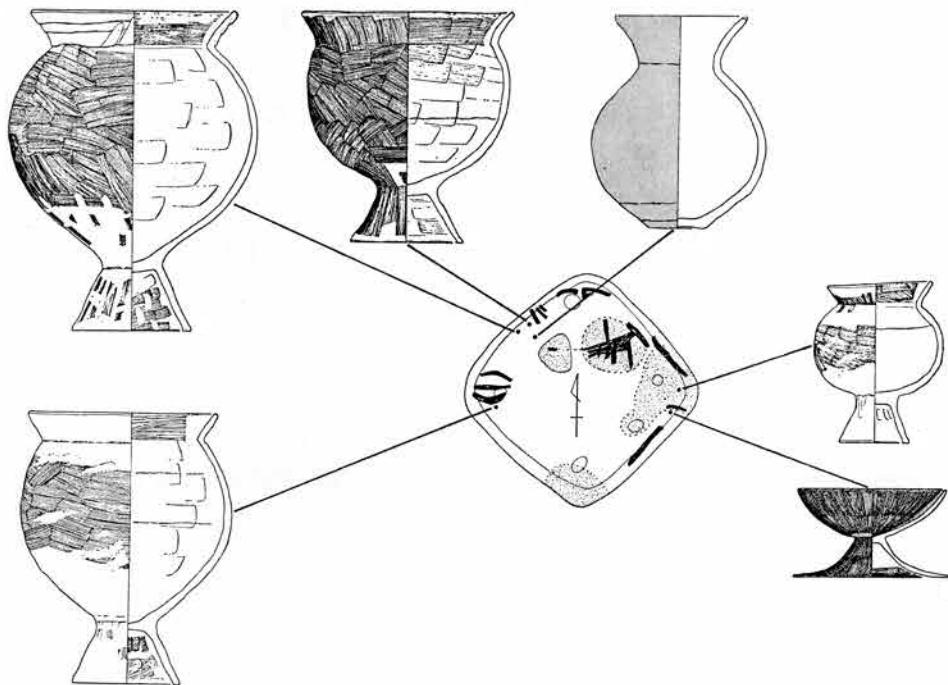
第4図 尾ヶ崎遺跡K2号住居跡
(『尾ヶ崎遺跡』より引用)



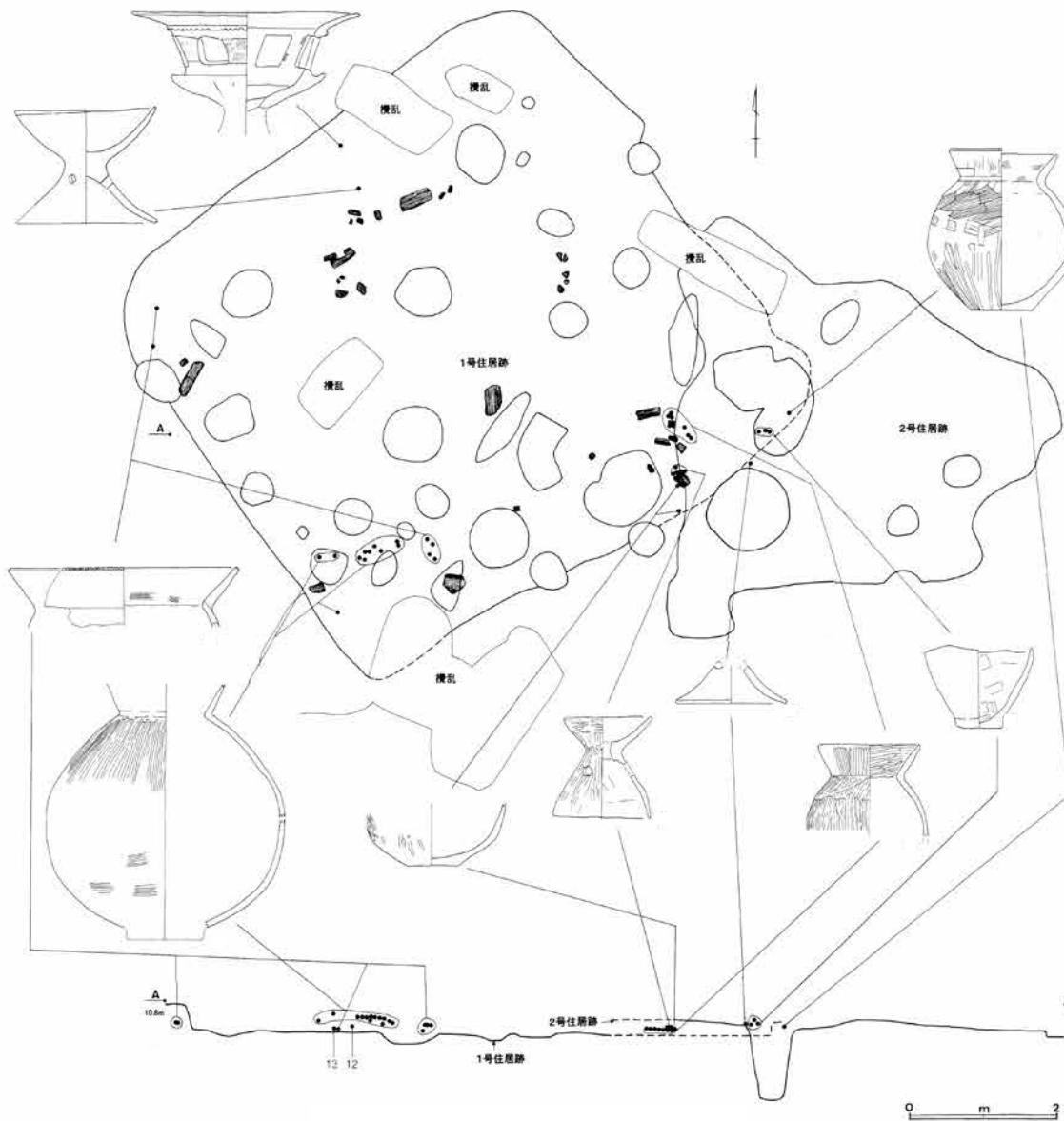
第5図 尾ヶ崎遺跡K5号住居跡
(『尾ヶ崎遺跡』より引用)



第6図 尾ヶ崎遺跡 K6号住居跡
(『尾ヶ崎遺跡』より引用)



第7図 尾ヶ崎遺跡 K13号住居跡
(『尾ヶ崎遺跡』より引用)



第8図 風早遺跡第3次1・2号住居跡
 (『風早遺跡第3次調査／馬場遺跡第4次調査』より引用)

炭化材は短いものが住居跡全体から出土している。数が少なく、方向に統一性も認められないため、用途は不明である。

1-3C 富士前遺跡第15地点

富士前遺跡第15地点は志木市柏町に位置する。当遺跡からは4世紀代の住居跡が1軒検出され、焼失住居と考えられている(第9図)。

コーナー部分のみ検出され、大部分は調査区域外へ続くため詳細は不明だが、壺や台付甕、高环等の遺物が多く検出されている。

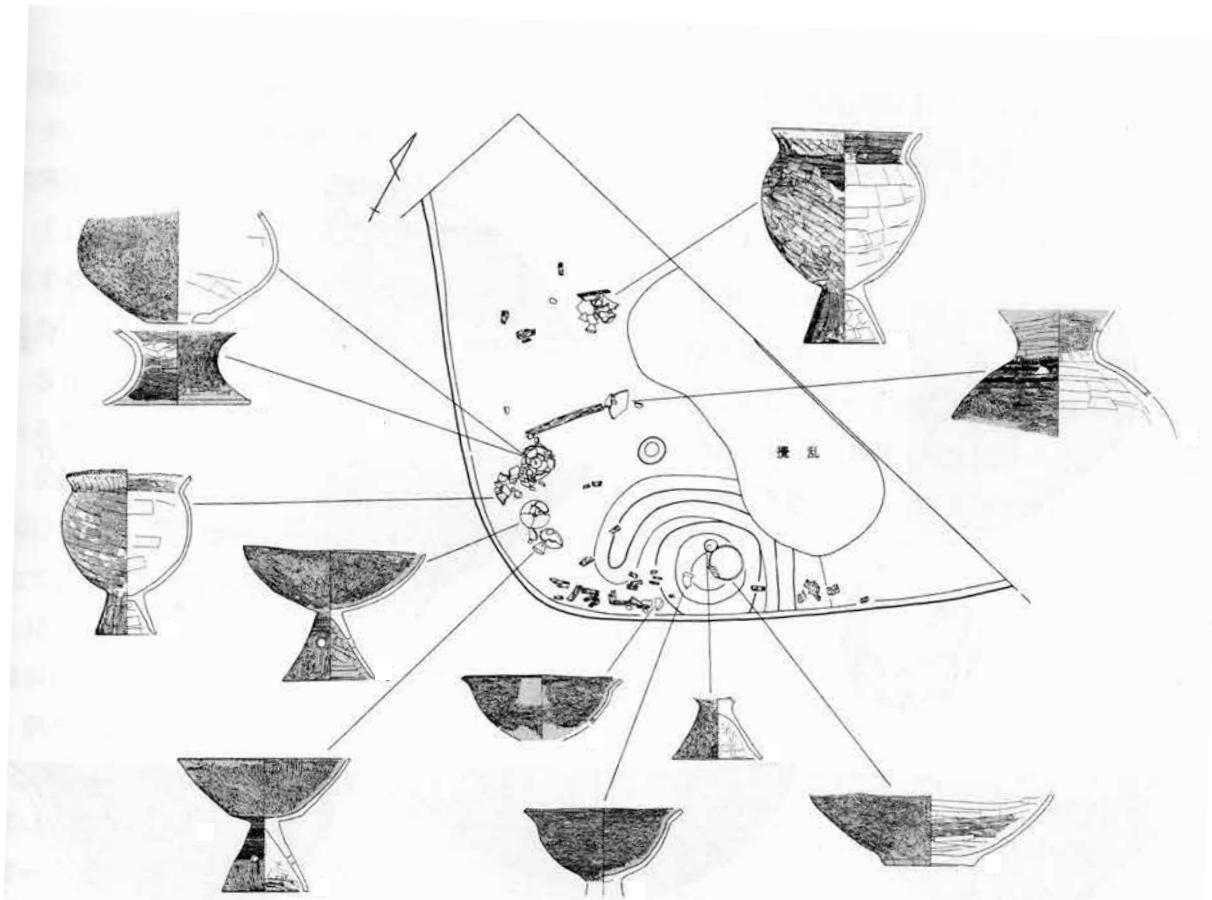
覆土全体に多量の焼土が含まれ、真っ赤な色を

呈していたとされることから、覆土は被熱した土屋根である可能性がある。

炭化材は壁際から検出され、細く短いものが多い。住居の全体像が分からず、また中央付近が搅乱を受けているため炭化材の用途は不明だが、土屋根に関連する材である可能性が高い。

1-3D 水深遺跡

水深遺跡は旧浦和市大字大間木字水深に所在する。古墳時代前期の住居跡が5軒検出され、この内、第10号住居跡から炭化材が多量に検出されているため、焼失住居と考えられる(第10図)。



第9図 富士前遺跡第15地点1号住居跡
(『志木市遺跡群9より引用』)

第10号住居跡は、長軸4.03m、短軸3.82mを測り、炉跡は北寄りから検出されている。遺物は少なく、甑形土器、甕型土器、高環の3点のみ出土している。甑形土器と甕型土器は、重なった状態で出土しているが、被熱等は認められないため、焼失後に埋められた可能性が指摘されている。

炭化材は住居跡全体から検出されている。方位等に統一性は認められないが、一部放射状の広がりが認められることから垂木材である可能性が考えられる。

1-3 E 中原後遺跡

中原後遺跡は旧浦和市大字三室字中原後に所在する。当遺跡からは古墳時代前期の竪穴住居跡が1軒検出されており、床面に炭化材や焼土が広がることから焼失住居とされている(第11図)。

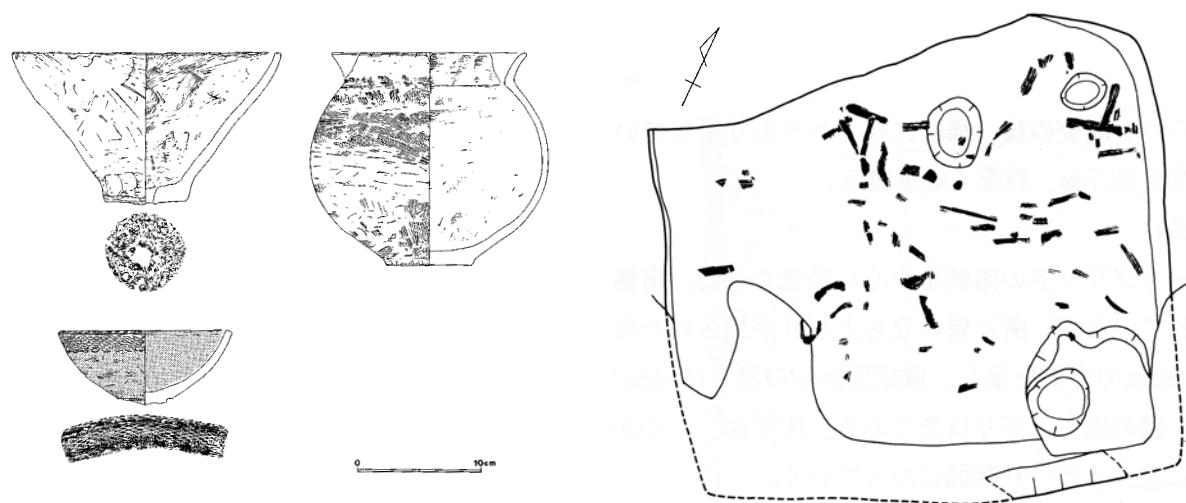
第7号住居跡は、長軸5.58m、短軸5.75mを

測る方形の住居跡で、炉跡は北東寄りから検出されている。遺物は台付甕や壺、埴の他に管玉、土玉が数点出土している。台付甕の頸部が「くの字」状を呈することや、胴部が球状になりかけていることから他の遺構よりも新しい時期のものと考えられる。

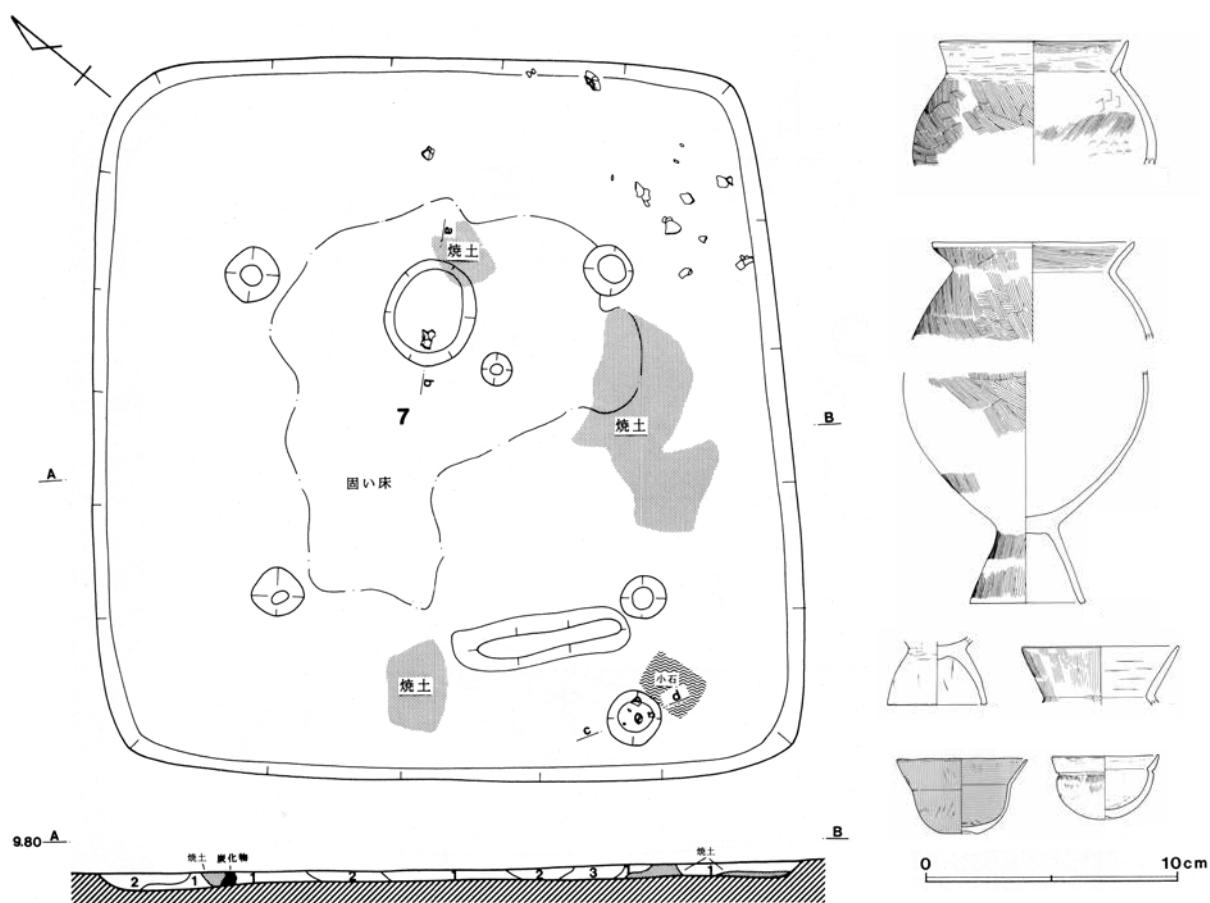
炭化材は平面図上には図示されていないため、分布傾向等は不明である。住居の南西側に焼土が広く検出されており、被熱した土屋根の可能性が考えられる。

1-4 各遺構の時期と前後関係

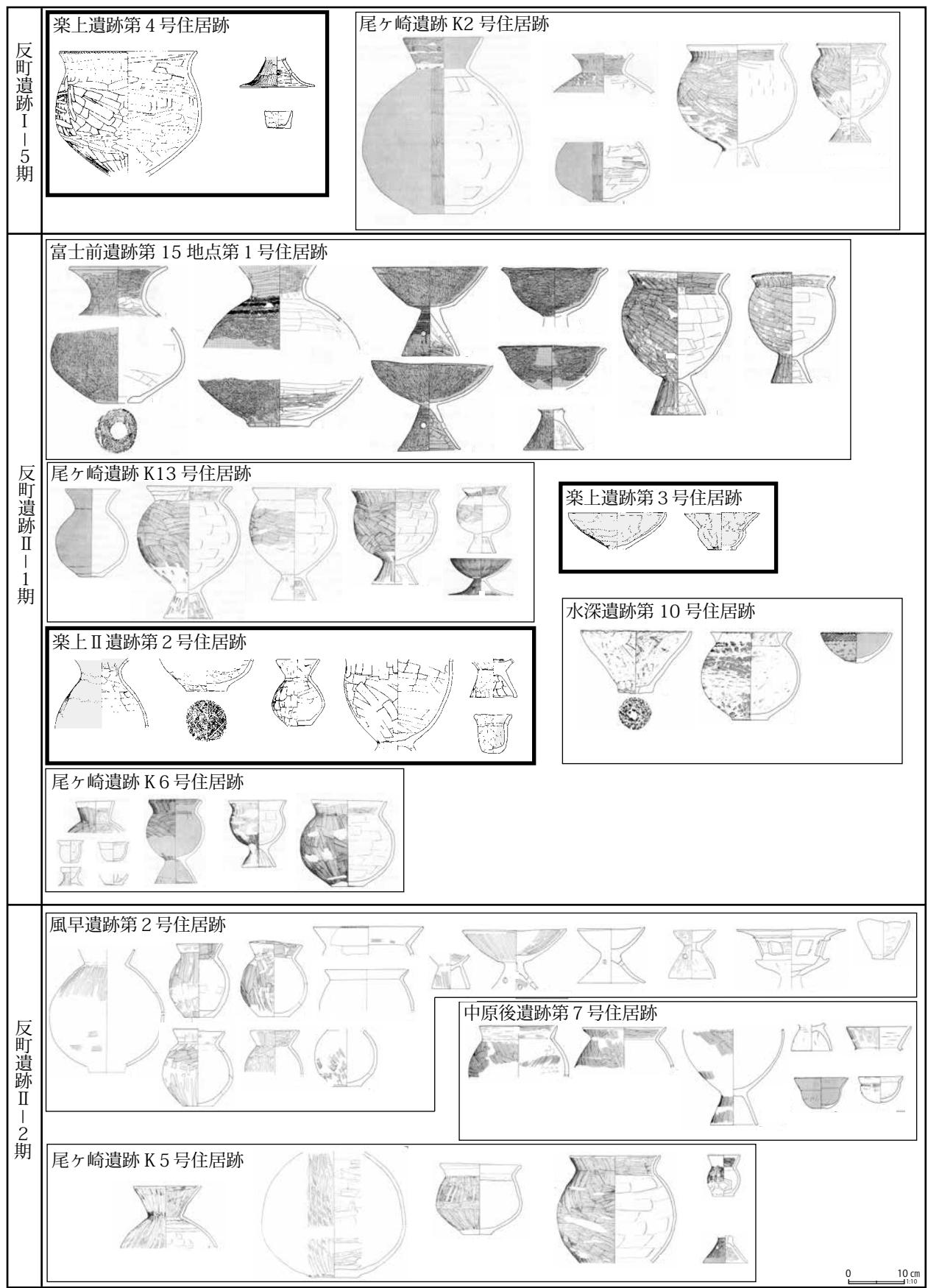
最後に前節まで概観した各遺構の時期差について見ていただきたいと思う。ここでは東松山市反町遺跡の編年(赤熊他2011)を基に、反町遺跡I-5期段階・II-1期段階・II-2期段階の3段階に区分した(第12図)。



第10図 水深遺跡第10号住居跡
 (『水深遺跡(第2次)・水深北遺跡(第3次)発掘調査報告書』より引用)



第11図 中原後遺跡第7号住居跡
 (『中原後遺跡発掘調査報告書』より引用)



第12図 各住居の時期（前掲資料を基に筆者作製）

1-4 A 反町遺跡I-5期段階

楽上遺跡第4号住居跡がこの時期に含まれる。この他に、尾ヶ崎遺跡K2号住居跡が該当する。台付甕の頸部が緩やかに屈曲し胴が張ること、壺の頸部が強く屈曲し、下膨れになるなど弥生時代的な特徴を持つため、反町遺跡I-5期とした。

年代は3世紀後半に位置づけられる。

1-4 B 反町遺跡II-1段階

楽上遺跡第3号住居跡と楽上II遺跡第2号住居跡が含まれる。この他に、富士前遺跡第15地点第1号住居跡、尾ヶ崎遺跡K13号住居跡、中原後遺跡第7号住居跡が該当する。頸部の屈曲が強い台付甕を当該時期に置く判断基準とした。

該当する遺構が最もも多い段階だが、この中でも若干古い様相を持つものと、新しい様相を持つものが含まれる。富士前遺跡第15地点第1号住居跡では頸部屈曲の強い台付甕の他に下膨れする壺などから反町遺跡古段階の中では古く位置づけられる。

楽上遺跡第3号住居跡は出土遺物数が少ないが、高環の内湾する口縁部形状などからやや古く位置づけられるが、高環の形状などから富士前遺跡第15地点第1号住居跡よりも新しいと考えら

参考・引用文献

- 青木義脩・小倉均・柳田博之 1994『中原後遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第177集 浦和市遺跡調査会
- 赤熊浩一他 2011『反町遺跡II』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第380集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 石野博信 1990『日本原始・古代住居の研究』吉川弘文館
- 鬼塚知典・石井匠・長谷川清一 2005『風早遺跡第3次調査／馬場遺跡第4次調査』庄和町遺跡調査会報告書第11集 庄和町遺跡調査会
- 尾形則敏・深井恵子 1999『志木市遺跡群9』志木市の文化財第27集 埼玉県志木市教育委員会
- 近藤行仁・岩内健二・駒見佳世子 1996『水深遺跡（第2次）・水深北遺跡（第3次）発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第210集 浦和市遺跡調査会
- 滝澤誠 2017『楽上／楽上II／薬師堂／石神／石神III』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第432集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 昼間孝次 1984『尾ヶ崎遺跡』庄和町尾ヶ崎遺跡調査会
- 福田聖他 2009『反町遺跡I』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第361集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 横川好富 1982『埼玉県の古式土師器』『埼玉県史研究』第10号 pp.1-18 県民部県史編さん室

れる。楽上II遺跡第2号住居跡は、壺の形状が尾ヶ崎遺跡K13号住居跡よりも新しいことから、反町遺跡古段階の中では新しい時期と考えられる。尾ヶ崎遺跡K13号住居跡は台付甕の頸部形状などから反町遺跡古段階の中頃としたい。

年代は3世紀末から4世紀前半に位置づけられる。

1-4 C 反町遺跡II-2段階

尾ヶ崎遺跡K5号住居跡・K6号住居跡、水深遺跡第10号住居跡が該当する。台付甕の球胴化、刷毛目方向の変化等から判断した。両遺跡の前後関係は不明である。

年代は4世紀前半から中葉に位置づけられる。

1-4 E 時期のまとめ

以上、各遺構から出土している遺物を基に、遺構の先後関係について述べた。まとめると、楽上遺跡第4号住居跡・尾ヶ崎遺跡K2号住居跡⇒富士前遺跡第15地点第1号住居跡・楽上遺跡第3号住居跡・水深遺跡第10号住居跡・尾ヶ崎遺跡K13号住居跡・楽上II遺跡第2号住居跡・中原後遺跡第7号住居跡⇒風早遺跡第2号住居跡・尾ヶ崎遺跡K5号住居跡・尾ヶ崎遺跡K6号住居跡・という順で推移する。

2 樹種同定（高橋）

2-1 試料

樹種同定を実施した試料は、楽上遺跡の SJ-3、SJ-4、楽上Ⅱ遺跡の SJ-1、SJ-2 の 4 軒から出土した炭化材 55 点である。

2-2 分析方法

各炭化材の形状・木取りを確認した後、同定用の破片を採取し、自然乾燥させる。木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の割断面を作製し、アルミ合金製の試料台にカーボンテープで固定する。実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）や Wheeler 他（1998）を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林（1991）や伊東（1995・1996・1997・1998・1999）を参考にする。

2-3 結果

樹種同定結果を表 1 に示す。楽上Ⅱ遺跡 SJ-2 一括は、観察したところ未炭化の樹皮であった。その他の炭化材は、広葉樹 2 分類群（コナラ属クヌギ節・コナラ属コナラ節）に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・コナラ属クヌギ節 (*Quercus sect. Cerris*) ブナ科

年輪の始めに大きな道管が 1～2 列並ぶ環孔材。孔圏外で急激に道管径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は单一、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20 細胞高のものと複合放射組織がある。

・コナラ属コナラ節 (*Quercus sect. Prinus*) ブナ科

年輪の始めに大きな道管が 1～2 列並ぶ環孔

材。孔圏外で急激に道管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管の穿孔板は单一、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20 細胞高のものと複合放射組織がある。

2-4 考察

竪穴住居跡から出土した炭化材にはクヌギ節とコナラ節が認められた。クヌギ節にはクヌギとアベマキの 2 種があるが、現在の関東地方にクヌギが広く分布するのに対し、アベマキは西日本を中心で分布し、関東地方には分布していない。そのため、今回のクヌギ節もクヌギの可能性が高い。クヌギは、二次林の比較的湿った場所や、河畔等に生育する落葉高木で、木材は重硬で強度が高い。一方、コナラ節には、コナラ、ミズナラ、ナラガシワ、カシワの 4 種がある。埼玉県内では、コナラが平野部に広く分布するほか、山地にミズナラが分布する。また、今井川越田遺跡（本庄市）の 6～7 世紀とされる種実遺体の中にナラガシワが確認されており（パリノ・サーヴェイ株式会社 1997）、この頃まではナラガシワが県内の平野部に生育していたことが明らかとなっている。こうした状況を考慮すれば、コナラ節はコナラあるいはナラガシワの可能性がある。コナラは、二次林の主要な構成種となる落葉高木、ナラガシワは山地や台地上に生育する落葉高木、木材は共に重硬で強度が高い。

本遺跡周辺では、北に隣接する北本市の台地上において、クヌギやコナラを主体とした二次林が広く分布している（細田 1995）。こうした二次林は、定期的な伐採等の人の手が加わることで維持され、放置すればシラカシなどの状漁広葉樹を主体とした森林に遷移するとされる。大宮台地とその周辺部の調査例をみると、寿能泥炭地遺跡（さいたま市）、伊奈氏屋敷跡（伊奈町）、後谷遺跡（桶川市）の縄文時代後期～晩期の資料にアカガシ亜属が認められるが、古墳時代の資料ではアカガシ亜属の確認例は知られていない。こうした状況を

表1 樹種同定結果

遺跡	遺構	番号	位置	分類	形状	種類	備考
楽上遺跡第1次	SJ-3	No. 1	貯蔵穴		ミカン割状	コナラ属コナラ節	
楽上遺跡第1次	SJ-3	No. 2	貯蔵穴		ミカン割状	コナラ属コナラ節	
楽上遺跡第1次	SJ-3	No. 3	貯蔵穴		破片	コナラ属クヌギ節	小径木
楽上遺跡第1次	SJ-3	No. 3		板材	柾目板状	コナラ属コナラ節	
楽上遺跡第1次	SJ-3	No. 4		丸木材	芯持丸木	コナラ属コナラ節	
楽上遺跡第1次	SJ-3	No. 5		板材	柾目板状	コナラ属コナラ節	
楽上遺跡第1次	SJ-3	No. 6		加工材	分割材	コナラ属コナラ節	
楽上遺跡第1次	SJ-3	No. 7		丸木材	芯持丸木	コナラ属コナラ節	
楽上遺跡第1次	SJ-3	No. 8		丸木材	芯持丸木	コナラ属コナラ節	
楽上遺跡第1次	SJ-3	No. 9		丸木材	芯持丸木	コナラ属コナラ節	
楽上遺跡第1次	SJ-3	No. 10		丸木材	芯持丸木	コナラ属コナラ節	
楽上遺跡第1次	SJ-3	No. 11		加工材	分割材	コナラ属コナラ節	
楽上遺跡第1次	SJ-3	No. 12		丸木材	芯持丸木	コナラ属コナラ節	
楽上遺跡第1次	SJ-3	No. 13		丸木材	芯持丸木	コナラ属コナラ節	
楽上遺跡第1次	SJ-3	No. 14		丸木材	芯持丸木	コナラ属コナラ節	
楽上遺跡第1次	SJ-3	No. 15		丸木材	芯持丸木	コナラ属コナラ節	
楽上遺跡第1次	SJ-3	No. 16		加工材	分割材	コナラ属コナラ節	
楽上遺跡第1次	SJ-3	No. 17		丸木材	芯持丸木	コナラ属コナラ節	
楽上遺跡第1次	SJ-3	No. 18		加工材	分割材	コナラ属コナラ節	
楽上遺跡第1次	SJ-3	No. 19		丸木材	芯持丸木	コナラ属コナラ節	
楽上遺跡第1次	SJ-3	No. 20		加工材	分割材	コナラ属コナラ節	
楽上遺跡第1次	SJ-3	No. 21		加工材	柾目板状	コナラ属コナラ節	
楽上遺跡第1次	SJ-4			丸木材	芯持丸木	コナラ属クヌギ節	
楽上遺跡第1次	SJ-4			丸木材	芯持丸木	コナラ属コナラ節	
楽上遺跡第1次	SJ-4			丸木材	芯持丸木	コナラ属コナラ節	
楽上遺跡第1次	SJ-4			加工材	分割材	コナラ属コナラ節	
楽上遺跡第1次	SJ-4			板材	不明	コナラ属コナラ節	
楽上遺跡第1次	SJ-4			丸木材	芯持丸木	コナラ属コナラ節	
楽上遺跡第1次	SJ-4			丸木材	芯持丸木	コナラ属コナラ節	
楽上遺跡第1次	SJ-4			丸木材	芯持丸木	コナラ属コナラ節	
楽上遺跡第1次	SJ-4			丸木材	芯持丸木	コナラ属コナラ節	
楽上遺跡第1次	SJ-4			板材	分割材	コナラ属コナラ節	
楽上遺跡第1次	SJ-4			加工材	分割材	コナラ属クヌギ節	
楽上遺跡第1次	SJ-4			丸木材	芯持丸木	コナラ属クヌギ節	
楽上遺跡第1次	SJ-4			丸木材	芯持丸木	コナラ属コナラ節	
楽上遺跡第1次	SJ-4			加工材	分割材	コナラ属コナラ節	
楽上遺跡第1次	SJ-4			丸木材	芯持丸木	コナラ属コナラ節	
楽上遺跡第1次	SJ-4			丸木材	芯持丸木	コナラ属クヌギ節	
樂上II遺跡第1次	SJ-2	No. 17			破片	コナラ属クヌギ節	
樂上II遺跡第1次	SJ-2	No. 18			破片	コナラ属クヌギ節	
樂上II遺跡第1次	SJ-2	No. 19			破片	コナラ属クヌギ節	
樂上II遺跡第1次	SJ-2	No. 20			分割状	コナラ属クヌギ節	
樂上II遺跡第1次	SJ-2	No. 21			破片	コナラ属クヌギ節	
樂上II遺跡第1次	SJ-2	No. 22			破片	コナラ属クヌギ節	
樂上II遺跡第1次	SJ-2	No. 23			破片	コナラ属クヌギ節	
樂上II遺跡第1次	SJ-2	No. 24			柾目状	コナラ属クヌギ節	
樂上II遺跡第1次	SJ-2	No. 25			分割状	コナラ属クヌギ節	
樂上II遺跡第1次	SJ-2	No. 26			破片	コナラ属クヌギ節	
樂上II遺跡第1次	SJ-2	No. 27			破片	コナラ属クヌギ節	
樂上II遺跡第1次	SJ-2	No. 28			破片	コナラ属クヌギ節	
樂上II遺跡第1次	SJ-2	No. 29			破片	コナラ属クヌギ節	
樂上II遺跡第1次	SJ-2	No. 30			分割状	コナラ属クヌギ節	
樂上II遺跡第1次	SJ-2	一括			破片	樹皮	未炭化

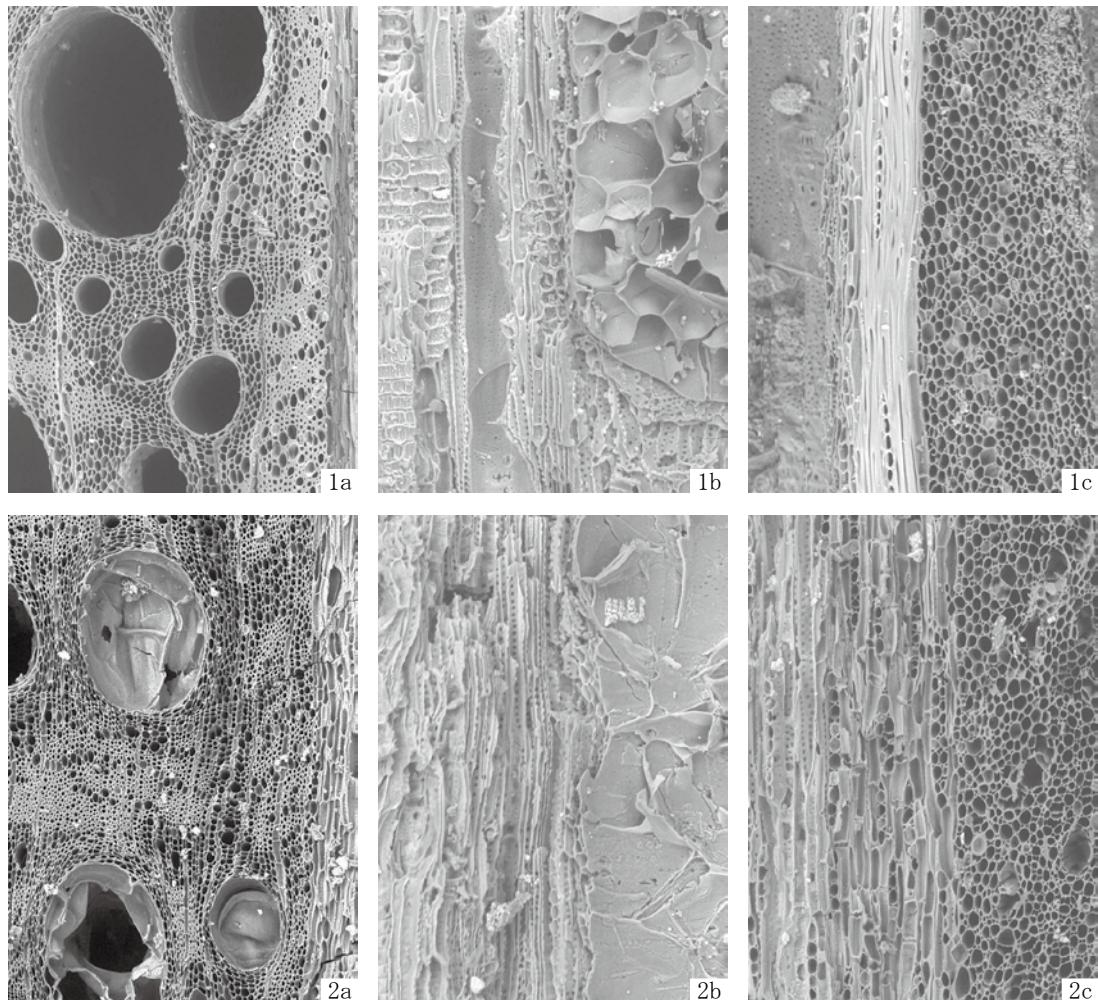
考慮すれば、古墳時代前期の本遺跡周辺でも台地上にクヌギやコナラを主体とした二次林が見られ、そこから木材を得ていた可能性がある。

竪穴住居跡のうち、楽上遺跡 SJ-3 と楽上 II 遺跡 SJ-2 は、比較的良好な状態で炭化材が出土している。いずれも住居の中央から外側に向かって放射状に炭化材が出土しており、垂木等を主体とすると考えられる。炭化材は芯持丸木とミカン割状の資料が混在している。樹種をみると、SJ-3 は大部分がコナラ節、SJ-2 は樹皮 1 点を除く全てクヌギ節に同定されている。SJ-4 は住居の南側を中心に炭化材が出土しているが、保存状態は悪い。これらの炭化材には、コナラ節を主体とした種類構成が認められ、SJ-3 の結果に似ている。これらの結果から、同じ 4 世紀前半の住居跡ではあるが、楽上遺跡ではコナラ節、楽上 II 遺跡ではクヌギ節を主体としており、遺跡によって種類構成が異なることが分かる。各住居跡の主軸長は、SJ-3 が 3.24m、SJ-4 が 5.59m、SJ-2 が 4.66m であり、住居跡の規模と樹種構成に関連は認められない。また、楽上遺跡と楽上 II 遺跡は隣接しており、各住居の検出位置は最大でも 300m 程度しか離れておらず、地形的な違いはほとんどない。したがって、立地環境による違いとも考えにくい。とくに楽上遺跡の 2 軒の住居跡では、コナラ節に混じってクヌギ節も認められ、いずれの木材も入手可能であったことが伺える。現状では、種類構成が異なる背景には不明な点が多く、周辺地域での資料蓄積が望まれる。本遺跡周辺では、同時期の住居跡から出土した炭化材の樹種を明らかにした例は知られていない。

表2 古墳時代前期における建築部材の遺跡別種類構成

種類＼遺跡	桶川市		浦和市		志木市		庄和町		合計
	楽上	楽上 II	水深 2 次	中原後	富士前 15	尾ヶ崎	風早		
クヌギ節	5	14	53	48	22	2	12		156
コナラ節	31		12		2	13			58
クリ					3				3
サクラ属									0
広葉樹					1				1
タケ亜科				3					3
不明		1		1					2
合計	36	15	65	52	28	15	12		223

範囲を広げて大宮台地とその周辺部で古墳時代前期の資料をみると、大崎北久保遺跡、中原後遺跡、水深遺跡第 2 次（旧浦和市）、富士前遺跡第 15 地点および第 23 地点（志木市）、尾ヶ崎遺跡および風早遺跡（庄和町）において建築部材の樹種同定を実施した例がある。遺跡別の種類構成を表 2 に示す。177 点中 139 点がクヌギ節、28 点がコナラ節、3 点がクリ、サクラ属が 1 点、タケ亜科が 3 点で、クヌギ節の利用が圧倒的に多い。点数の少ない大崎北久保遺跡を除く、各遺跡の資料をみると、中原後遺跡と風早遺跡ではクヌギ節のみで構成され、コナラ節は認められない。中原後遺跡のタケ亜科は、屋根の萱材等に由来すると考えられる。また、水深遺跡と富士前遺跡 15 地点ではクヌギ節を主体としてコナラ節やクリが混じる組成となっている。一方、尾ヶ崎遺跡では、コナラ節を主体としてクヌギ節が少數混じる。これらの結果から、クヌギ節やコナラ節が、広い地域で建築部材の主体として利用されたことが推定される。また、県内の事例をみても、クヌギ節を主体とする遺跡と、コナラ節を主体とする遺跡があることが分かる。こうした遺跡間の違いは地形的な立地環境の違いとも考えられる。クヌギ節とコナラ節は、花粉化石では分類ができず、コナラ亜属として一括される。そのため、クヌギ節とコナラ節に着目した植生の地域的な特徴は把握できていない。そのため、クヌギ節とコナラ節の使い分けの背景については、焼失家屋から出土する炭化材の樹種同定調査の密度を高くして、地形などと比べなら古植生と木材利用について情報化していくことが必要である。



コナラ属クヌギ節(SJ-2; No.17)
コナラ属コナラ節(SJ-3; No.7)

a:木口, b:柾目, c:板目

— 100 μm:a
— 100 μm:b, c

第13図 炭化材

引用文献

- 林 昭三 1991『日本産木材 顕微鏡写真集』京都大学木質科学研究所.
- 細田 浩 1995「北本市の植生」『北本動植物誌』北本市教育委員会 pp.391-414
- 伊東隆夫 1995「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ」『木材研究・資料』31 京都大学木質科学研究所 pp.81-181
- 伊東隆夫 1996「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ」『木材研究・資料』32 京都大学木質科学研究所 pp.66-176
- 伊東隆夫 1997「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ」『木材研究・資料』33 京都大学木質科学研究所 pp.83-201
- 伊東隆夫 1998「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ」『木材研究・資料』34 京都大学木質科学研究所 pp.30-166
- 伊東隆夫 1999「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ」『木材研究・資料』35 京都大学木質科学研究所 pp.47-216
- パリノ・サーヴェイ株式会社 1997「今井川越田遺跡における古植生と植物利用」『今井川越田遺跡Ⅲ 本庄今井
工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第191集
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 pp.369-376
- 島地 謙・伊東隆夫 1982『図説木材組織』地球社 pp.176
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編) 1998『広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト』伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修), 海青社, pp.122 [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].